入選

受け継ぎ、受け継ぐ

宗近　忠　　神奈川県横浜市　　六十五歳

庭に男性の拳大の檸檬が沢山なっている。この檸檬の木、実家の檸檬の木から父に接ぎ木してもらい、受け継いだ。

「檸檬の木が欲しい…」小さな庭のある家に越した時に父に相談した。すると父は接ぎ木をしてくれた、自分の檸檬の木から。父は檸檬の香りが大好きでした。庭で檸檬を収穫することを夢見て大切に育てていました。この檸檬の木は毎年沢山の実をつけるので母が檸檬マーマレードにしていました。

「お父さんが育てた檸檬、大切にしないと」皮を残すことなく使い、少し苦みが強い母特製檸檬マーマレードでした。

家庭を持ってからもマーマレードが実家から届き、両親の健康と豊作に感謝し、マーマレードの瓶を開けていました。苦みのある懐かしい味。子供の頃に思いを馳せました。両親は他界し、実家は処分しました。勿論、檸檬の木も。でも、接ぎ木で受け継いだ檸檬の木は沢山の実をつけるようになっています。母特製檸檬マーマレードも我が家の味に。父から受け継いだ檸檬と母から受け継いだ檸檬マーマレードの味、次の世代にも受継げたらなと、最近思う様になった。ふと風に吹かれ重たそうに枝を揺らす檸檬を数えていた。

「檸檬の木が欲しいんだけど…」嫁ぎ先から遊びに来ていた娘に後ろから声をかけられた。

「…分かった。うちの檸檬の木で良いだろう？接ぎ木してあげる」

「本当、有難う」

そんな歳になったのか、と。

そして、何だかとても嬉しくて…。